

小学校卒業生・義務教育学校前期課程修了生へのメッセージ

卒業、修了おめでとうございます。

皆さんは、入学時に比べると心も体も立派に成長されました。特にこの1年間は、最高学年として、責任感と行動力が身についたことでしょう。

さて、昨年3月以降、新型コロナウイルス感染症の大流行という人類始まって以来の苦難の中にいます。皆さんも、学校生活だけでなく、家庭での生活においても、今まで当たり前できていたことができなくなり、がまんを強いられる1年間だったことでしょう。しかし、この苦難よりも想像できない深い悲しみをもたらした出来事が10年前に東北地方で起こりました。東日本大震災です。その当時の「9歳の男の子」のお話を紹介します。皆さんのこれからの生き方の参考にしてください。

それは、ある警察官が語ったお話でした。震災直後のある夜、その警察官は食料を配る手伝いのために避難所へ向かいました。そこにはようやく届けられた食料を受け取るために、たくさんの被災者が列を作っていました。その最後尾に目をやると、9歳ほどの男の子が厳しい寒さの中をTシャツと半ズボンという身なりでたたずんでいました。気になって声をかけた警察官は、その子が語り出した悲さんな体験に言葉を失いました。

「地震の後、お父さんが小学校に車で迎えに来てくれました。けれどもその時、大きな津波が来て、お父さんが車ごとのみこまれていくのを3階のベランダから見た。海の近くの自宅にいた母親や弟と妹もたぶん助からないと思う。」

その9歳の男の子は、不安を打ち消そうと涙をぬぐいながら必死に話してくれたのです。

ふびんに思った警察官は、男の子に自分のコートをかけてやり、用意していた食料パックを渡しました。きっと喜んで食べてくれるだろうと思ったのです。ところが、その男の子はどうしたか。何と、その食料パックを配給用の箱に置きに行ったのです。

「ぼくよりお腹をすかせている人がたくさんいるだろうから…。」

両親も弟や妹も行方不明で、不安と悲しみに打ちひしがれ、空腹と寒さの中で絶望している9歳の少年が、それでも困難に耐え、自分のことよりも他人を思いやる姿に、警察官はもう涙で少年を見ることはできませんでした。

今、東北は東日本大震災から10年という節目を迎えています。まだ、元通りになることはありませんが、9歳の男の子のように、人々は困難に耐えて人を思いやり支え合うことで、前に進もうと復興への道を進めています。

卒業生、修了生の皆さんは、新型コロナウイルス感染症の拡大予防のため、これからも命を守る取組をしなくてはなりません。がまんが続きます。中学校へ入学、後期課程へ進級し、環境が変わり余裕がなくなり周りが見えにくく、つい自分中心の行動を取るかもしれません。そのような時、「9歳の男の子」のお話を思い出し、一人一人が思いやりの心を持ち、支え合い助け合える人になってください。支え合うことは強さに変わります。さらなる成長を期待しています。未来を担っていく卒業生、修了生の皆さんに幸多かれと祈ります。

令和3年3月23日 養父市教育委員会